

## 有島武郎と末光績

宮野光男

今日までになされてきた有島武郎研究、なかんずくキリスト教との関係におけるそれは、「リビンダストン伝」第四版序」を論拠とするものがその大方であった。が、それらの論は、「序」が大正八年という時点における有島のキリスト教理解であることや、それが世に問うというかたちでなされた、いわば表向き告白であるということを、とかく忘れられ、また伝記的事実との混同さえもなされたものが大部分であったように思われる。もちろんそれも故なきことではない。有島のキリスト教との関係を表わす伝記的資料、およびそれに関する研究の乏しいことも、その理由の一つであらうし、札幌独立教会員としての有島（教会に退会届を出してそれとの絶縁を公にしたことは周知のことではあるが）の交友関係が、ただ追悼文として発表されているものによるだけで、ほとんど世に知られていないという事実も原因として考えることができるのである。

末光績——有島最後の時叢文閣の主筆助素一とともに壱井沢に急行し、その遺体の後始末をした者であるということは知られている。しかし、末光がなぜ足助に同行しそのような役割を果たしたかについてはあまり知られていないのであるが、実はかれは札幌独立教

、会員であり、有島の初期の日記や書簡にみられるように、信仰の交わりをなし、親交を結んでいた友人の一人であった。たとえば、有島の明治三十四年五月十二日付の日記には、円山にて森本厚吉や末光らとともに祈禱会を催したことが記されているが、この交わりが「兄弟だも知らざる愛情を以て」なされたものだと言っている。また、明治三十五年十二月十六日付の末光あて書簡には「我が肉の兄弟にまさる愛の友よ」と書いている。

もちろん、意識的にキリスト教から離反し、その上に立って作家としての生活をした有島と、一方は生涯キリスト者としての自覚に立って生活をした末光であるからには、その交わりには時としては「末光は其後いたちの道だ」（大正十年十一月二十三日付、足助あて書簡）と言っているように多少の消長もなかったわけではない。しかし末光は、有島に関する刊行物はすべて購め、その歩みを見つめ、生涯弟信三とともに、その祈りのなかにおぼえ続けた者の一人であったのである。

今度、はからずも末光績の遺文および遺稿の一部に接することができたので、この機会に末光の紹介をしておきたいと思う。末光はその生涯を教育者として過すと同時に、かれは旅と登山とを愛する詩人でもありエッセイストでもあったが、今回は、かれの遺したも

のなかで、とくに有島との関係を表わしているものを中心に、その交友関係や影響など、末光を通して知ることのできる有島に焦点をあわせて考察してみたいと思う。

## 二

末光は、明治十四年三月十五日、愛媛県東宇和郡宇和町大字卯之町に生まれた。有島に後れること三年である。中学校を京都の同志社で修めたが、『足助素一集』（昭和六年十月、吹田順助、秋田雨齋らとともに末光の手によって叢文閣より出版された。）の追憶篇に収めてある末光の「素一兄と僕」によれば、同志社で一年先輩の足助と知りあったことが、末光と有島との出合の遠因であった。

明治三十三年三月、同志社中学を卒業した末光は、札幌農学校学芸会発行の『札幌農学校』（明治三十一年）を入手、さらにすでに農学校予修科に入学をしていた足助の助言などもあって、同年七月、札幌農学校予修科に入学した。

当時の足助は「事に触れて基督教を罵倒す」（前掲書、足助素一年譜）る存在であったが、その足助に連れられて有島らの「土曜会」に参加したことが、末光と有島の出合の機会であった。

▲十一月二十四日有島武郎、森本厚吉、木村徳藏の三先輩を中心とせる土曜会生れ、河内、末光等と共に同会に集ふ。

素一年譜の明治三十三年の項にはその日のことをこのように伝え

有島武郎と末光

ている。

末光は土曜会について、有島、森本、木村の三名が卒業のとき撮影した写真の裏面に

於札幌土曜毎ニ相会ス、英文学研究、感話其行事タリ。自由ト  
欲喜自カラ会者ヲ結ブ。月ヲ重ナル事六、七、得ル所多大ナリ  
キ。木村、森本、有島ノ三兄業ヲ卒ヘテ札幌ヲ去ルニ当リ、明治  
三十四年六月三十日送別会ヲ催シ記念ノ為ニ此一葉ヲ撮影ス。三  
兄ノ去札ト共ニ会ノ使命モ亦讀了セシモノナルカ?

と記している。

末光と有島との関係は単に土曜会のメンバーとしてのそれだけではなく末光の人生を方向づけるほどの親しい友人関係であった。末光は札幌農学校に入学するまでに、すでに同志社中学においてキリスト教に接してはいたが、その生活は、「真にばんやりして無考への生涯でした。（中略）只だ正邪に対して激烈な愛憎の念を有して居た外は真に何もない」ものであった。明治三十九年三月十八日付の菅原かつるあて書簡（註一）には当時を自ら省みて、さらにつきのように述べている。

只だ怪き信にたよる事が出来なくなつて、自分の存在も他のあらゆる手にさばり眼に見ゆる物の存在も疑ふに至りしは札幌に来てでありましたが、形ある我が肉体よりも先づ靈なる我れと、形な

き靈なる神様の存在をおぼろな光の中に認め、靈（知と情と意とを含む）と肉体との我が全き生命が只だ神の御手に懸り神様無しには片時も生きて居る理由を認めぬよふになり、只だ神様の御心を知らん為めに縊ての文字と言に力を探り（真に父の前に行つて話す様に又言を聞く事が出来るよふに）活ける祈りをする事の出来る児とせられん為めに、他の縊てを顧みないで一生懸命になるに至つたのは、三十四年の一月頃でありました。「中略」其頃に色々な疑の中にも涙を以て私を導いてくれたのは、森本君と有島君でありました。

特に有島は生命の兄として真に力に感じて居ました。

先に公にした小論（註二）において指摘したように明治三十四年当時の有島は、かならずしも確信に満ちた信仰者ではなく、常に、自己認識における肯定と否定との激しい葛藤の中に生活していたのであるが、その人生に対する誠実さは、後輩末光をして「全く君の信仰に同化せられ、人格の香に酔うてしまった」（「火の前に立ちて」）「有島武郎個人雜誌」終刊有島武郎記念号」と言わしめるものであったのである。

末光が有島の勧めで札幌独立教会の日曜学校の教師になつたのは明治三十四年四月のことであつた。

其の四月の頃であつたと覚えますが、近く自分等は去らねばならぬから、後を代つてやつてくれよと云ふて日曜学校の事を有島が切に頼みましたから、初めには力尽して出来ぬ理由を述べて断り

ましたけれど、其理由ならば僕等も同じ事だと涙もて余りに頼むものですから、遂にこばみ兼ねて、恐れの中にも彼の祈を力として、祈りつつ出て行きました。（「前掲菅原かつゑあて書簡」）

文中、日曜学校とあるのは、いわゆる教会学校のことである。後に関係した遠友夜学校であるかいなかについては、山田昭夫の調査（註三）によれば、当時はまだ有島が遠友夜学校の専任の教師であつたという確証はないので判然としないが、明治三十六年、すでに農学校を卒業し、東京に帰つていた有島が札幌を訪問した際に、末光がかれに夜学校における「（自分の）立場等に就て語」つたと書いている（「前掲菅原かつゑあて書簡」ところから、有島の卒業後には遠友夜学校にも関係したことは事実であろう）。

しかし、かれらにとつては、学生時代に奉仕したところが日曜学校であつたか、あるいはまた、遠友夜学校であつたかはこの際問題ではない。ただ「我が終生執るべき業は何であらふ」の問に對して、信仰の実践の場として創られた「学校」に関わることが「従ふべき聖旨」であり、「人の心に関する業」を信仰をもって自らの生の目的とすべきであるという答を得たところに、その意義を見出すことができるのである。

先に引用した菅原かつゑあて書簡には、さらに末光と有島の将来に関する計画、そのための末光の準備についての有島の意見、あわせて有島の渡米の目的に関するなどが記されているので、いささか長くはなるが紹介しておきたいと思う。

三十六年の春でしたが兵營から出て後札幌に（農学校へ助教として）有島が来るとの話がありましたから、非常な喜びを以て聞かしてやりました。「中略」所が答は、一寸そんな相談はせられたけれど夏に森本と共に渡米したいと思ふて居るとの事でした。所が六月の二十三日だったと覚えます。（其頃は私は会堂へ札幌独立教会の会堂・筆者註）の裏に居ました。「ごめん」と戸を開いて入って来た者があるから中の戸を開いて出ますと、何ぞ計らん有島でありました。只だ「あゝ」と言ふたのみで二人とも言は出ませんでした。共に黙して室に入りました。彼は申しました。

「札幌に来たのは一寸農場に用事はあるがそれは口実で、實際（は）三人の人に逢ふ為めである。一つはおまへ、今一人は足助（其の当時非常に精神上苦しんで居まして只だ彼を力と頼んで居たものですから）、今一人は可憐な子供（彼が特に同情を持って居た一人のものです）。そして君には一つ特に語らねばならぬ事があるが、それは後の楽しみにしよふ。」と、それから大島先生の所に行ったり色々用事を果して後、かつて語りつつ幾度となく共に歩んだ豊平の堤に出ました。長く積つて居た話は順序もなしに二人の口より漏れました。所で夜学校に關して新渡戸先生の御話があった事など聞き又該校に於ける私の立場等に就て語る内に、自づから話は「学校」なるものの上に向ひました。そして前から切に感じて居た、今我國に小さくともよいが真の精神の滿ちた学校の一つもなき事を話す内に、知らず知らず私の言は主によれる我が希望の向に流れて行きました。彼は押へ兼ねた口を開いて申しました。「特に告げる事のある、とききに言ふたのは其の事

よ。其の事の爲めに足は北に向ふたのよ。」の言を（つた）話し始めたのは之でした。（単に意味だけを記ししよふ）「渡米せんと思ひ定めしも其れが為めであるが、御許あらば將米に於て真に主によれる生命ある学校の生るゝ事を見たいと思ふて居るのよ。今君の云へる所と全く等しき意味に於ける実質で。決して大を望まないで実なるものを起したいのよ。森本とは他の点に於ては全く考へが一致して居るけれど彼は「寄附でもかまはぬ、賛成者よりは受けて、少し形を供へたものに初めからせねば、今は三十年前の様には行かぬから」と云ふ考へを持って居るが、それだけはどふしても一致が出来ぬ。僕はやはり初めは塾の様なものでなくてはならぬと信じて居るのよ。若し君が同じ考へを持って居るならば如何に力強いかと思ふて、君に其れを聞きたいと思ふて居たのだが、君から先ず其の考へを聞いて、僕の話す所はもふ無くなつた。」（競馬場の南の大水門の所でした）〔中略〕

そして次の年の夏には定めねばならぬ学校の実科に就て共に考へました。其の備の爲めに何を撰ぶが適當かと。實際直接に近き科は経済でした。而し本校の経済は教授の爲めに実に価値が薄いです。（多くの人に就て聞き、殊にこの時に彼の言によつて知るを得ました。）科学は直接に近くはありませぬ。却つて精神的の途に傾くものには最も遠い位置にあるようですけれど、其の素養が無ければ又健全な精神上の土台の上に立つ事は難いのです。遠く見へて最も大切な一つの土台です。故に彼は申しました。

「却つて遠き科学を茲で学んで置いてはどふだ。」と。私もそれは考へて居た所ですから。尚ほ静かに考へる事に致しました。

其夏休には河内と有島と三人で東京まで行きました。彼とは東京で別れました。私が国に在る間に彼は一封の長き手紙を残して海を渡つて米の地に行きました。以来一年の間、種々考へました。遂に科学の一つを撰ぶ事を心に定め、自分で多少の趣味を有して居たのと勉強の上に最も有力である理由のもとに植物を撰びました。〔以下略〕

明治三十六年の札幌での有島との再会については、有島日記同年六月二十三日の記事と照応するが、そこで話された内容は末光の書簡で明らかになるのである。とりわけ、この中で有島の渡米の目的について述べているのは興味深いことである。これまでの研究では、有島の渡米の目的は、「これまで私の身辺に絡っていた凡ての情実から離れて、本当に自分自身の考へで自分をまとめたいといふ心願だった。」〔「リビンググストン伝」第四版序〕という有島のことで説明されてきた。そして、それはあたかもキリスト教離反の一つの徴候として考えられてきたのである。しかし、それは末光の書簡にみられるように誤りである。すなわち、それはすでにキリスト教から意識的に離反した時点において考えられた、結果から逆に説明された原因究明の試みもたらした、有島自身と論者との二重の誤りなのである。ここに「序」のもつ伝記資料としての一つの限界を見ることができよう。事実、有島の米国生活は、かれにキリスト教離反への傾を与えたといふことはできよう。しかし、渡米

決意までの有島を支えていたものが、信仰の実行者になるための準備の必要性を思う気持であつたことを不問に付すことはできないのである。

### 三

明治三十九年六月、札幌農学校を卒業した末光は、郷里に帰り、松山歩兵第二十二聯隊第十二小隊に一年間志願兵として入営した。以後受媛県東宇和郡立農蚕学校〔後農業学校と改名〕教諭を経て同校校長となり、さらに松山農業学校校長を歴任した。当時の教育者としての末光は、『字和校友会誌』所収の「歡喜」〔大正二年二月〕、「母校の窓」〔ク三年四月〕、「農業者の算盤」〔ク五年七月〕、「松山農業学校校友会誌」所収の「農学校」〔ク九年七月〕、および講演原稿「農村の使命」〔ク四・五年のころ〕などによって知ることが出来る。

一方、米国留学を終えて帰国した有島が、明治四十年十二月より母校に教鞭をとつたが、やがて明治四十三年「白樺」創刊とともにその同人となり、作家としての生活を始めたことは周知ことであるが、当時の末光は、有島の「誠意と真剣味を疑ふことはなかった」〔前掲「火の前に立ちて」〕が、「二人の間には思想上同じ流れに浸ることの出来ない分子の生じて来たことを感じ始め」〔同前〕ていたのである。有島自身も「兄の行く道と小生の今行かんとする道とは多少相異を生じ来れる際なれば彼の雑誌『白樺』のこと、筆者註」は兄に多少の苦痛を齎らさずしては已むまじと存せられ

候。」〔明治四十四年十二月十九日付、末光あて書簡〕と書いているように、互に一種の隔絶感を持ちあっていたのである。

この隔絶感是有島の札幌獨立教会からの退会に端を發したものであるといふことができる。従来、有島の教会退会の時については二説あった。その一つは有島の死について内村鑑三が『万朝報』に書いた「背教者としての有島武郎」の一文中の「此人〔有島のこゝと・筆者註〕が急に信仰を棄てて了った。たしか明治四十一年であつたと思ふ。私は札幌に於て彼に会つた」という記事を論拠とする四十一年説であるが、これはすでに、安川定男によつて内村の記憶ちがひであつたことが確かめられている。もう一つの説は「リビングストン伝」第四版序の「三十四歳で私は元の嬰兒になつた。」を論拠とするもので、逆算して明治四十四年をその年とする説である。周知のとおり、現在公にされている有島の日記は、明治四十三年のものは六月二十三日、七月十六日の二日間、四十四年のものは、二月七日、三月四日、五月十五日の三日間だけである。つぎは、大正三年九月十八日であり、その間全く空白であるために日記から退会の日を知ることが、直接の感想を知ることが不可能であつた。そこで有島の教会退会を問題としその根拠としてのキリスト教批判はもつぱら『序』によつてきたのである。先に述べたように、そこには時間的なずれと圧縮とがみられ、思想の内容も解釈の対象として検討されなければならないものであるにもかかわらずである。ところが、末光の記録によると、――それは保存されている有島書簡に付されたメモであるが、明治四十三年八月二十日付の末光あて書簡について、

有島武郎と末光續

兄が札幌獨立教会を脱退した後  
足助兄が伊与なる小生の郷里を訪ひ  
て北に帰られし時

と書かれているのである。

末光の記憶に誤りがないかぎり、そしてまたそのメモが付された書簡が有島の退会を背後において考えなければ理解されないものであるところから、有島の教会退会は明治四十三年の春であつたにちがいないと思われるのである。

生が取りたる此度の step に対してかかる同情ある声を聞き得たるは実に生の至幸とする所なり。洵に兄の云はるる如く生の此度の態度は一層自己の根柢に立脚せんとする努力に過ぎざるにて要するに生にとりてはかくする事が生を一層真面目ならしめたる所以なりと思ひたればなり。而して此点に於て兄と生とは依然同一の道程を歩めるものと称せざる可らず。〔明治四十三年八月二十日付末光あて書簡〕

有島の米田生活を経て教会退会に至る経緯についてはさらに詳細に考察し跡づけなければならないが、先の書簡の引用からも、教会退会という行為が疎外された状況からの脱却と自己確立への志向に支えられたものであることを窺ひ知ることができよう（註四）。そして信仰の確立と実践のための場であり、眞の人間を形成する場として考えられていた「教育」が、退会後においても木村徳藏あて書

簡〔明治四十四年十一月二十九日付〕の中で「到底自己理想の教育を為さんと欲せば現代にあつては自ら塾なり学校なりを開くの外なき事と存申候」と言い、あるいはまた末光の弟信三（註五）あての書簡（補一）の中で、現在の官学の制度からは生命力の横溢した青年を生み出すことの困難さを述べているように、真の精神的自由を身につけた人間形成の場でないならぬと考えられていことを知るときに、有島のキリスト教からの離反の意義をさらに明確に知ることができるのである。

その意味では人生に対する誠実な態度において末光と有島とは何ら異なるところはなかったものであり、まさに「同一の道程を歩む」者ということができずはなすものであった。しかし、それが末光においてはキリスト教信仰に依つて立つ誠実さとその実践であり、有島は、キリスト教否定、換言すれば自律的自己確立を目ざすものであったところに二人の関係の中に、一種の隔絶感を感じずにはいられない素因が胚胎していたのである。

#### 四

その生涯をキリスト者として全うした末光の信仰は、先の菅原かつゑあて書簡の他に、いくつかの感想文と説教の原稿とによつて知ることができよう。

明治四十三年八月六日、末光は「教会と伝道」と題する長文の感想を書いてゐる。これが何に発表されたものであるか詳でないが、稿末の付記によると明治三十七年十一月十五日発行の「独立教会」第十七号に「真の伝道」と題して発表したものに加筆訂正したもの

である。そのほか説教のための不完全な草稿以外に、ほぼ完全な形で遺されているものは、大正八年ごろ、松山榎町教会でした「祈禱」と題する説教原稿、大正九年十二月、松山教会での説教「人クリスト」の原稿の二つである。これらの遺文を通して一貫して流れているものは、まず制度教会に対する批判である。

若し茲に外形によらず総ての事<sup>こと</sup>の心実<sup>こころまこと</sup>のみを透視する眼があつたならば、今日の我基督教界を何と見るであらう。彼は必ずや殆んど総ての基督教の合同が単に名のみであり、政略的であつて内には各人の靈はばらばらであり、互に相憎嫌して何等靈的合一の実を見る事が出来ず、又伝へらるゝ所は皆基督教の外衣のみであつて源を神の活靈に発して居る活ける福音とは全く別物なるを見て驚くであらう。（中略）

嗚呼大なる会堂、雲なす群集塵辭に満ちたる大説教、神の御前に何たる光景ぞ。冷岩踞り、おどろ暗き森の彼方より吹き来る木枯の、茫々立てる茅と蓬の叢を吹き乱す晩秋の荒野に例ふべきではあるまいか。「教会と伝道」]

教会を荒野と観じ、その中に生きた信仰の生息し難い状況を痛感したのは、かならずしも末光だけではない。思えば有島も、教会が「既に我等が温情を暖むるに足る所ならざる」（明治四十一年一月二十二日・日記）ものであることと思いを巡らしたのである。ただ有島は「少くとも現存の教会は如何に改良進歩するとも、遂に今後<sup>しんご</sup>に生るゝ Generation の要求を満足せしむる事は不可能事な

るべし。」〔同前〕として、教会の存在を否定し、自らも教会の束縛から逃れようとしていたのに対して、末光はあくまでも眞の教会を待望するものであった。

末光は、教会の逸しやうい状況を「形にはめて生命なき信仰」、「伝説と人間の監視に遂はるゝ活動」ということばで表現している。

伝説と慣習に抱きついて眞生命を取り逃がして居る事と情性の一致を度外視して殊勝げに進捗して行く心的活動がありとせば、エマルソンのこの警鐘に驚かされて醒めねばならぬ。

shake off your traditions,  
stand on your own faith,  
depend upon naked ability,  
and fear not!

若し我等にして唯だ伝説を受信して自ら眞の力に触れずして盲妄するならば、赤心確めてこの警鐘を聞く時に自ら死屍に抱きつきて生の脈の断たれ居るを感じて驚くべきである。丁度余輩の学生時代に *Ingersoll* を読みし時の如く。「〔人クリスト〕」

いずれの全集にも収録されていない書簡ではあるが、末光の回想によれば、有島が米国でエマソン記念館を訪れた記念に、引用中のエマソンのことばを記した総論書を末光に送ったということである。その時には、それがよもや有島のキリスト教に対する否定への契機であるとは夢にも考えなかつた末光は、かえってそのなかに「

有島武郎と末光續

新鮮なヴイガー」を感じたのであった。しかし、その後有島よりインガソルの講演集が送られてきたこともあわせ考えるに、それが有島の心の転機を物語っていたことに気づかされるのである。末光のこの観察は、まことに正鵠を得たものであるということができよう。エマソン、インガソルに関しては、有島の米国生活、なかんずく、その後半の生活を考えるときに、ぜひ言及しなければならぬ問題であるが、少くとも有島のキリスト教離反の契機として彼らとの出合を位置づけていることは末光の卓見としなければなるまい。

ところで、先の引用でみたようにその否定的契機としてのエマソン、インガソルが、末光には肯定的契機として受容されている事實は、まことに興味深いことであるといえよう。立場こそキリスト教を肯定する者と否定する者との相反する関係にありながら、キリスト教のなかに潜在する問題点を同一のものを手がかりとして指摘したという事実のなかに有島と末光との精神構造の同一性を見出すことができるのである。

末光のキリスト教信仰におけるもう一つの特徴は、そのキリスト観にみられる神性否定の傾向である。

生々したる肉を有せる Christ、彼自身なる基督。彼自身に伝説を離れて抱きつき度い。彼を我等と全く別質なるものとよぶ信ぜぬ。飽くまで人であらせたい。眞の人であらせ度い。眞の実なる彼が神に溶取せられ得し先例が、我等が又眞の信により聖化に



より神に溶け入り得る希望である。「人クリスト」

有島の信仰、なかならずそのキリスト觀が信仰者としての自覚のもとに生きていた退会以前のみならず、それ以後においても、ただひたすら「人間イエス」への憧憬であったことを思うときに、こどももまた有島と末光との精神構造の共通性を見出すことができるのである。それと同時に、かれらのそのような信仰を培った札幌農学校、あるいは札幌独立教会という精神風土の特殊性が問題となってくるのである。一面においては非常に厳格なビュリタニズムの伝統が守られていながら、他面ではカーライルを始めとするロマンチズムの流れをくむ自然信仰が——換言すれば正統的なキリスト教教義を否定することになる「人間の神性」についての楽天的確信が、青年たちの魂のなかに共存することのできた特殊性とでもいうのであろうか。それはまたかれらの指導者の問題でもあったのである。

## 五

詩人としての末光が、いつの頃からその志を持つようになったのかは詳ではないが、大正十年三月、松山農業学校長を辞任し、東京大学文学部本科「英文科」に入學、Robert Nichols 教授の指導のもとにワーズワス研究を志したのもその一つの顕現であったといふことができよう。当時すでに四十一才、六児の父であった末光にはこの方向転換は多くの犠牲をともなったにちがいないが、かれにとつては、「内なる飢渴」を満たすための「活くべき糧と水を

求め」てやまぬ「多年待望し來つた一筋の道」。「火の前に立ちて」だったのである。大正八年一月、東京遊學のことを足助、有島に相談し發意を求めたときには、共にかれの計画には難色を示したということであるが、「足助素一集、追憶「素一兄と僕」」有島は「末光續の上京は其意や実に偉とすべきも大分問題に御座候先般面会の節共に大に談じたる所に御座候然し思ひ立ちたる事は成否に不拘やつて見るの外は可無之候乍不及共に出来る丈けの努力は致度考に御座候」と、竹崎に書き送っている。「大正八年一月十七日付、竹崎八十雄あて書簡」ように、生活変革への意向に対しては同情を抱いていたのである。思えば、自らの精神上の危機を脱するために生活の革命を試みなければならなかつた有島には、末光の問題は人事ではなかつたのであろう。

大正八年の發意は愛媛県側への懇請によつて実現しなかつたが、遂に十年に至つて断然職を辞したのである。そのころすでにかれは自作の詩の發表を考えていたらしい。初めは有島の序文を得て叢文閣より出版しようと考えていたが、それは足助、有島兩人の意見で断念した。有島はしきりに自費出版を勧めているが、それは末光の望むところではなかつたらしい。結局有島に新潮社などへかけあつてもらつたが結果は思わしくなかつたようである。その間の事情は大正十一年九月一四日付末光あて書簡などによつて知ることができ（註六）——（補二）

末光が發表しようと考えていた詩稿がその後どのようなふうには不明であるが、その後のかれの詩人としての動きは主として東大英文科出身者によつて創られた同人詩誌「ボエチカ」においてなき

れた。かれはそこで詩を発表するかたわら、山湖と号して随想をも書いている。その内容は人生論、あるいは身辺雑記のほかに紀行文、登山記などであるが、それらの随筆からも「自然の熱愛者」末光の面目をよく知ることができる。

田中準、入江直裕、北村喜八などの東大英文科出身の者たちが始めた詩誌『ポエチカ』の第二期の同人となった末光は、昭和八年一月ポエチカ叢書第四篇として『末光續詩集』を上梓した。これはその後書きにあるように昭和三年以来『ポエチカ』で発表した詩のなかから自然を対象とした詩篇を七十篇選出して収めたものであるが、かれの「自然詩人」たることは、

札幌農学校から自然詩人が出なくて、と久しい間むなしく望んでいた僕の期待は、自然詩人末光いでて遂に実現された。〔夜霜庵主人「自然詩人末光續」『ポエチカ』第十三巻第一号〕

私の自然観は私の人生観である。大自然を離れて私の人生はない。自然物に対する私の感情は、人間に対する私の感情を其波紋に於て全然同型である。〔「私の詩に就て一言」『ポエチカ』第十三巻第四号〕

とあるように自他ともに認めるところであった。末光のこの自然観はかつての有島がそうであったように、信仰と表裏一体をなすものである。

有島武郎と末光續

我は恐ろしく我が本性に気障りないやな分子を有して居るけれども純なる我の内には神に溶け入る質の存するを信ぜざるを得ず。人なるものの真価はそれだ。又この質が極く稀くとも自然の内にも存するを感ずる私はこの意味で鳥に取られたセキレイの子を逐い行く親セキレイを見て催眠術にかかった如く立ちすくむ。朝露を帯びて美はしく並べる Clover の三つ葉を見て涙ぐむ事もあった。〔「人クリスト」〕

この神認識および人間観（「自然観」が末光のキリスト教信仰における位置づけを、かならずしも正統的なものとする事ができないものであったとしても、かれのなかにある自然および人間の善なるものとしての認識がワーズワスを受容する基調であったということができる。）

有島の自然観は信仰の変化にもなって変貌をとげるものであったことはすでに述べたところである（註七）が、末光の有島理解は常にこの自然観が媒介となっていたのである。「野の氣」と題する随想（大正十五年七月十日、『基督教学生運動』第三巻第二十四号）のなかで、「故有島氏の死を遂げる少し前に友に語った言葉の内」に「已に秋子は舟橋で死を迫ったが、僕は人間には未練がないが、大自然には未練がある。も一度寂しい秋の風物を見たかったのだ……」という節がある。まことに、薄っぺらな人情一つでは解し難い心持であるが、大自然に溢れて居る力強い生命の交渉が敏感な彼の心緒に触れて、知らず発動せしめた気持ではあるまいか。」と

書いているが、この自然の持っている生命力を自らの生の根源としてあくがれ求める者としての有島が、末光の有島理解の中核をなしていたということができよう。あるいは、この有島こそ、末光の心の中に生き続けることのできた、ただ一つの姿であったのかも知れない。

並み立つ落葉は忘れ難い独特の姿を顕はし、足もとに茂る牧草、灌木に絡む野薔薇、葦切雀の稚高い声までが之れに添ひ加はつて、石狩の野の曙を其儘そこへ連れ出して来た。あゝ君と僕との隔てなき熱い心の抱擁にはどうしても北海の自然が其背景に添はねばならないのであろうか。「火の前に立ちて」

有島の遺体を茶毘にふした末光は、白みかかった東天をのぞみながら、かれに「終生の提題」を残して逝った有島をこのように偲んでいるのである。

以上遺されたものを参考にして、末光續の紹介を有島との関係あるところに焦点をあわせて述べてきた。本来ならば末光續についてはその晩年について、なかなしくキリスト教主義学校である恵泉女学園の理事として河合道子園長を助け、かれ本来の宿願を果したことなどについてふれなければならぬのであるが今度は割愛することにした。

最後に末光が「ポエチカ」第十卷第二号に発表した「有島武郎をおもふ」と題する短歌四首を掲げて筆を擱きたい。

\* \* \*

悲しみを持ちつつ着けり軽井沢

きりにつつまれ今暮れむとす

柩べに灯りを一つ先だてて

しじまにたどるやみの高原

花ごぎに包める柩守る吾れに

野茨の香しみてわびしも

並び燃ゆる二つのかばね燃えさかり

一つとなりて落葉松に映ゆ

(註一) 菅原かつゑは末光續夫人友喜氏の姉である。当時、友喜夫人は姉の保護を受けていたのであるが、この書簡は母親がわりともいうべき姉かつゑに自分の精神上の発達の経緯を述べ交際の許しを求めたものである。

(註二) 「有島武郎研究」——自然観にみられるキリスト教受容と定着の考察——『国語教育研究』第八号

(註三) 「有島武郎と札幌遠友夜学校」——新資料による雑考——『国語国文研究』第一五号

(註四) この間の事情については拙論「有島武郎研究」―フレンジ精神病院における看護夫生活の意義の考察―(梅光女学院短期大学紀要第一号)においていささか言及している。

(註五) 末光信三は明治十八年十一月、續の次弟として愛媛県東宇和郡宇和町大字卯之町一番耕地一五七三番地に生れた。明治四十三年七月札幌農学校(当時すでに東北帝国大学農科大学となっていた)卒業、翌年米國ベルモント州ミッドバレー大学に入学、哲学と英文学を専攻した。大正三年六月同大学を卒業し帰国、同四年母校予科講師となった。以後大正九年京都に移住、同志社大学予科教授となるかたわら、キリスト教主義幼稚園マクリン幼稚園長、日本キリスト教団賀茂教会牧師を兼任した。現在は同志社関係の職は辞任し牧会に専念している。

札幌農学校本科生時代に兄績を通して当時予科教授として在職していた有島の知遇を得、かれの主宰する社会主義研究会に吹田順助・原久米太郎・逢坂信彦らとともに出席した。以後交友関係は有島の最後のときまで続けられたのであるが、かれもまた有島の死が人生に対する誠実さゆえの運命であったとする者の一人である。かれの有島に対する態度は、「真剣な人」「文化生活」有島武郎追悼号)と題する追悼文によって知ることができ、なお(補一)の信三あて書簡は、巻紙に毛筆で書かれたものであるが、未発表のものであるので、全文をここに紹介しておく。

(註六) 末光の詩稿に関する書簡のなかで未発表の葉書があるの

有島武郎と末光

で(補二)に紹介しておく。これは第九回二科美術展覧会に出品した有島生馬の絵「ピアノ練習」の色刷絵葉書の絵の部分にペン書きされたものである。

(註七) 註二に同じ。

(補一) 【有島武郎未発表書簡―】

御在米中折々御消息を下さり候にも不係当方よりは毎時御無音に打過居候段御海容被下度 此度御無事御帰朝につきても小生よりこそ御祝辞も可申上筈之処今般却而兄より御手紙を辱ふし万謝に不堪候 兄が札幌に御赴任相成候様運候事は小生之竊かに熱望致居候処にて大学ヨ「予」科之為めに多大之進歩を致さしむべきものなる事を信じ喜悅に不堪候 特に承れば御赴任草々より四方に活躍し青年N為めに色々御尽粹相成居候由北敷に辺在して思想之主潮に接し易すからざる青年等に取りて如何程之慰藉と鞭撻に相成候かは計り知るべからずと存候

小生が在勤滿六ヶ年之経験が教ゆる所によれば文部省之教育方針なるものは真に一顧に値せざるものと存候 かかる方針によりて厳密に製造されたる青年は成業の後数年にして発育力を失ひ去るべき運命を与へらるゝものと存候 只数多なる青年中彼所此所に金玉の如きものの潜めるを見るは教育に従事するもの唯一之慰藉と存候 彼等に接し勧め励まし慰め行く快は天上天下無類の事に候 小生も兄がかかる青年の幾人かを得らるゝの幸を想像して今の境遇

申上候 何しろ御互に力のある限り不退転の力を進之度と願ひ居候

御心に懸け下され候病妻は依然床中に在候得共幸にも近来快癒之曙光を認め得來候事偏に心強く存居候 早々彼女の健康を回復し彼女が従來夫に事へ小兒を育つる為めに経來れる千辛万苦に対して万

一之慰安を酬ひ度熱望致居候  
札幌は既に雪の下に埋もれ候半 新英州の風土に慣れたる兄の事なればさして変化ある候候には無之候半も折角御自愛風邪などに犯され給はぬ様切に奉祈上候

御序の節もあらば旧同僚諸君にも宜敷御伝言被下度 名様申せば恰も昨夜かのヨ「予」科の教員室の一遇に自己を見出したる夢を見申候

東京は連日の晴天市中は只何となく騒ぎ居候様に候

草々拝

十一月十六日

末光兄

武 郎

(補二) 【有島武郎未発表書簡一—】

九月十八日〔大正十一年〕

武 郎

御たより拝見しました。

兄の気持ちには十分よくわかりましたから兩三日の中に新潮社に談

より寧ろ一種之嫉妬をすら感じ申候 特に御願申上候兄が従來読まれ又は今後読まれ候書籍などにて面白しと思はれ候ものは何卒節々御教示に預度 小生も亦心付きたる良書もあらば御知らせ可合してみます。返事が来るまでに多少の時日のかかる事を御承知下さい。

追記

本稿をなすにあたっては末光友喜夫人、末光信三氏のご好意とご協力を賜りました。記して感謝の意を表します。

訂 正

68頁下段の第一行より第三行までは  
同頁上段の冒頭に入り、67頁下段より  
続く部分であります。

したがって、68頁下段の第四行目  
「合してみます。…」が、同頁上段  
の最終行「新潮社に談」に続くこ  
とになります。